The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	校訂鬼谷子三巻訳稿（1）
Author(s)	高田，哲太郎
Citation	中国研究集刊. 2006, 40, p. 109-139
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/60939
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

中国研究集刊　露号（総四十号）平成十八年六月　一〇九―一三九頁

校訂鬼谷子三巻訳稿（1）

髙田哲太郎

前言

鬼谷子は戦国時代の縦横家に属するものであるが、我が国では余り顧みられる事のない文献であり、訳注の類もほとんどない(注1)。本稿は、その欠を補おうとするものである。底本は、正統道蔵本（四部叢刊本）を使用し、嘉慶十年江都秦氏本、四庫全書本等を参照して校訂した。（原文中にある算用数字は、所謂「陶宏景注」の位置を示すものである。原文、書き下し文、訳文の最後にある算用数字は段落番号を示す。道蔵本では「梁陶宏景注」の表記は無い。ここでは嘉慶十年本に拠って巻上、中、下の下総てに補った。）

鬼谷子　巻上

梁陶宏景注

捭闔　第一1

粤若稽古、聖人之在天地間也2、爲衆生之先3。觀陰陽之開闔以命物4、知存亡之門戸5、籌策萬類之終始、達人心之理、見變化之朕焉6、而守司其門戸7。故聖人之在天下也、自古至今、其道一也8。　1

捭闔（はいかふ）　第一

粤若（ここ）に古（いにしへ）を稽（かんが）ふるに、聖人の天地の間に在るや、衆生の先為り。陰陽の開闔（かいかふ）を観て以って物に命し、存亡の門

戸を知り、萬類の終始を籌策し、人心の理に達し、変化の朕を見、其の門戸を守司す。

故に聖人の天下に在るや、古より今に至るまで、其の道は一なり。 1」

捭闔　第一

さて、いにしえの事から推察するに、聖人という存在が、この世に実在する意味は、人々の先導ということにある。聖人は、陰陽の開闔、つまり有無の存在消滅の現象を観察し、ことばによって物（我以外）を定義し、存亡の門戸、つまり有無の存在、価値観が生み出される関門が口、言語であることを認識し、ことばによる分類、定義の構造を意識化し、人の心がどのような原理に従っているのかを体得し、その心の跡としての変化、現象を観察し、その大本としての口、言語（価値、世界を生み出す原点）を維持支配している。（それは、言語によって支配されず、主体を保ちつつ人々を言語によって価値付ける立場にあるということである。）それ故に、聖人が世に存在するのは、時を越えて、言語の支配者であることに変わりはないのである。 1」

陶宏景　注

1　捭、撥動也。闔、閉藏也。凡與人言之道、或撥動之、示其同也。或閉藏之、示其異也。

2　若、順。稽、考也。聖人在天地間、觀人設教、必順考古道而爲之。

3　首出萬物以前人、用先知覺後知、用先覺覺後覺、故爲衆生先。

4　陽、開以生物、陰、闔以成物。生成既者、須立名以命之也。

5　不忘亡者存、有其存者亡。能知吉凶之先見者、其惟知機者乎。故曰、知存亡之門戸也。

6　萬類之終始、人心之理、變化之朕迹、莫不朗然玄悟、而無幽不測。故能籌策遠見焉。

7　司、主守也。門戸、卽上存亡之門戸也。聖人既達物理之終始、知存亡之門戸。故能守而司之、令其背亡而趣存也。

8　莫不背亡而趣存。故曰、其道一也。

變化無窮、各有所歸9。或陰或陽、或柔或剛、或開或閉、或弛或張10。是故聖人一守司其門戸、審察其所先後11、度權量能、校其伎巧短長12。夫賢不肖、智愚勇怯、仁義有差。乃可捭乃可闔、乃可進乃可退、乃可賤乃可貴、無爲牧之13。　2」

変化は無窮なるも、各帰する所有り。或は陰、或は陽、或は柔、或は剛、或は開、或は閉、或は弛、或は張。是の故に聖人は一に其の門戸を守司し、其の先後する所を審察し、度権量能、其の伎巧の短長を校ぶ。夫の賢不肖、智愚、勇怯、仁義差有り。乃ち捭くべく、乃ち闔づべく、乃ち進むべく、乃ち退くべく、乃ち賤しくすべく、乃ち貴くすべく、無為にして之を牧す。　2」

変化は窮まりなく、現象は無限に循環しているが、それぞれの物事は、やはりその物事としてそれぞれ行き着くところがある。それは、ひとまずある一定のかたちに落ち着くということであって、陰であったり、陽であったり、剛柔、開閉、弛張といったある形に行き着くものなのである。だから、聖人は、ひたすら現象の門戸、つまり価値世界の原点たる口、言語を支配し、そのことばによって生み出された価値世界の変化の過程を詳細に考察し、どこから何を指してどう言うのかということの権能をはかり、その効果の優劣を比較するのである。あの、個人の持ち前として、自己相対化能力に優れる賢者、自己に執着する不肖者、知能の高い者、智に興味を示さない者、人に対するあり方として、勇敢な者、卑怯者、人に対する思いやりの深い仁者、人に道義を示そうとする者たちには、それぞれもって生まれた差というものがある。そこで、ことばというものを、言ったり言わなかったり出来るのであり、自身としては、ことばによって進んだり退いたりでき、人に対しては、ことばにより、卑しい立場にしたり、貴くしたりできるのであり、すべては、己を超えて、言うべく言うという無為のあり方で、これをコントロールするのである。　2」

9　其道雖一、行之不同。故曰、變化無窮。然有條而不紊。故曰、各有所歸。

10　此言、法象各異、施教不同。

11　政教雖殊、至於守司門戸則一。故審察其所宜先者、先行、

所宜後者後行之也。

12 權、謂權謀。能、謂材能。伎巧謂百工之役。言聖人之用人、必量度其謀能之優劣、校考其伎巧之長短。然後因材而用。

13 言賢不肖、智愚勇怯、材性不同、各有差品。賢者可捭而同之、不肖者可闔而異之。智之與勇可進而貴之、愚之與怯可退而賤之。賢愚各當其分、股肱各盡其力、但恭己無爲牧之而已矣。

審定有無與其實虛、隨其嗜欲、以見其志意14。微排其所言、而捭反之、以求其實、實得其指、闔而捭之、以求其利15。或開而示之、或闔而閉之。開而示之者、同其情也。闔而閉之者、異其誠也16。可與不可、審明其計謀、以原其同異17、離合有守、先從其志18。卽欲捭之貴周、卽欲闔之貴密。周密之貴、微而與道相追19。 3」

◎道藏本は、「與」を「以」に、「實」を「貴」に作る。俞樾『諸子平議補録』の説に従って改めた。

有無と其の実虛とを審定し、其の嗜欲に隨ひ、以て其の志意を見る。微に其の言ふ所を排し、捭して之を反し、以て其の実を求め、実、其の指を得れば、闔して之を捭し、以て其の利を求む。或は開きて之を示し、或は闔して之を閉づ。開きて之を示す者は、其の情を同じくするなり。闔して之を閉づる者は、其の誠を異にするなり。可と不可とは、其の計謀を審明し、以て其の同異を原ぬるも、離合、守有れば、先づ其の志に從ふ。即し之を捭せんと欲すれば、周を貴び、即し之を闔せんと欲すれば、密を貴ぶ。周密の貴、微にして道と相ひ追ふ。 3」

さて、そこで、物事は、事実として有るか無いかと、その人の言葉が真実であるか虛偽であるのかを詳細に判定し、その人の欲するところに沿って、何を望んでいるのかという彼の意図を見抜くのである。そこで、密かにその人の言ったことを並べて比較し、その事について口を開いて反論して、それに対する反応によってその人の真実としていることを求め、その人が実際に考えていること、その目的方向をつかんだなら、それについては口を閉ざし、これを踏まえた上で発言して、そこでその状況下における有利なあり方を求めるのである。この際、或る時は発言し、或る時は何も言わない。発言してこちらの考えを示すということは、こちらがこう有ってほしいと思う本当のところ（「情」）を同じくする場合であり、何も言わないという事は、こちらが実際にはこうするの

が正しいと思っていること（「誠」）を異にしている場合である。そして、その言っていることができるかできないかについては、その計画を明確に把握し、これに基いて、情を同じくすることか、誠を異にすることかを考えるが、人がその計画につくかつかないかは、それぞれのあり方や立場に制約されるものであるから、まず、相手の意志に沿って対応する。だから、もしその計画について口を開こうとするなら、「周」（確実に伝わること）を貴び、口を閉ざそうとするなら、「密」（絶対漏れないようにすること）を貴ぶ。周、密が重要だということは、それが微妙で「道」（言葉を生み出す原点に己を超えて一体化した本来的あり方）と相即不離だということである。

3」

14 言任賢之道、必審定其材術之有無、性行之虚實、然後隨其嗜欲而任之、以見其志意之眞僞也。

15 凡臣言事者、君則微排抑其所言、撥動以反難之、以求其實情。實情既得、又自閉藏而撥動之、彼、以求其所言之利何如耳。

16 聞而同之、所以盡其情。闔而異之、所以知其誠也。

17 凡臣所言、有可有不可。必明審其計謀、以原其同異。

18 謂其計謀雖離合不同、但能有所執守、則先從其志、以盡之、以知成敗之歸也。

19 言撥動之貫其周徧、閉藏之貫其隱密。而此二者皆須微妙合於道之理。然後爲得也。

捭之者、料其情也。闔之者、結其誠也20。皆見其權衡輕重、乃爲之度數聖人因而爲之慮21。其不中權衡度數、聖人因而自爲之慮22。

故捭者、或捭而出之、或捭而納之23。闔者、或闔而取之、或闔而去之24。捭闔者、天地之道25。捭闔者、以變動陰陽、四時開閉、以化萬物。縱横26、反出、反覆、反忤、必由此矣27。

4」

之を捭（はい）すとは、其の情を料（はか）るなり。之を闔（かふ）すとは、其の誠を結ぶなり。皆、其の権衡軽重を見、乃ち之が度数を為し、聖人、因りて之が慮を為す。其の権衡度数に中らざれば、聖人、因りて自ら之が慮を為す。

故に、捭とは、或は捭して之を出し、或は捭して之を

納る。闔とは、或は闔して之を取り、或は闢して之を去る。捭闔は、天地の道なり。捭闔は、以て陰陽を変動し、四時の開閉は、以て万物を化す。縦横、反出、反復、反忤、必ず此に由る。　4」

口を開くということは、相手の「情」（こうあってほしいという本当のところ）を推し量ることである。口を閉ざすということは、相手の「誠」（こうするのが正しいと思っていること）をはっきりさせて動かせないようにすることである。いずれも、その計画のバランスとポイントを観察し、そこで基準を定め、聖人はそれに基いて構想を練る。その計画が、バランスが取れず、基準にかなわないものであれば、聖人はそこで自ら構想する。

それ故に、捭（口を開く）とは、或る時は口を開くことである計画、事柄を発生させ、或る時は口を開くことでその事柄を封じ込めることである。闔（口を閉ざす）とは、或る時は口を閉ざすことである計画、事柄を採用して具体化をはかり、或る時は口を閉ざすことでその事柄を切り去ってしまう。この様に口を開くと閉ざすということ、つまり「捭闔」は、天地自然の本来のあり方に一致したものである。だから、「捭闔」は、そのことで陰陽、つまり有無の存在、現象するこの言葉によって成り立つ現実世界を変化させ動かすものであり、「四時の開閉」、つまり自然の移り変わりは、そのことで万物を変化させているのである。「縦横」（自由自在に世界を動かし物事を取り仕切ること。忤合篇24）や、「反出」（反論してみることで真実を引き出すこと。反応篇7）、「反覆」（過去を振り返ることで未来をつかんだり、相手を知ることによって、それに対応する自らを知ったりするといったこと。反応篇7）、「反忤」（ある計画や人物の、いずれを採りいずれを捨てるかという対応。忤合篇23）、これらの事は、必ずこの「捭闔」に基くものなのである。　4」

20 料謂簡擇、結謂繁束。情、有眞偽、故須簡擇。誠、或無終、故須繁束也。

21 權衡既陳、輕重自分。然後爲之度數以制其輕重。輕重得所因而爲設謀慮、使之遵行也。

22 謂輕重不合於斤兩、長短不充於度數、便爲廢物、何所施哉。聖人因是自爲謀慮、更求其反也。

23 謂中權衡者出而用之、其不中者納而藏之也。

24 誠者闔而取之、不誠者闔而去之。

25 闔戸、謂之坤、闢戸、謂之乾。故謂天地之道。

26 陰陽變動、四時開閉、皆捭闔之道也。縱横、謂廢起也。萬物或開以起之、或闔而廢之。

27 言捭闔之道、或反之令出於彼、或反之覆來於此、或反之於彼、忤之於此、皆從捭闔而生。故曰、必由此也。

捭闔者、道之大化、說之變也。必豫審其變化28。吉凶大命繫焉29。口者、心之門戸也。心者、神之主也30。志意、喜欲、思慮、智謀、此皆由門戸出入31。故關之以捭闔、制之以出入。

捭之者、開也、言也、陽也。闔之者、閉也、默也、陰也32。陰陽其和、終始其義33。故言長生、安樂、富貴、尊榮、顯明、愛好、財力、得意、喜欲爲陽曰始34。故言死亡、憂患、貧賤、苦辱、棄損、亡利、失意、有害、刑戮、誅罰爲陰曰終35。諸言法陽之類者、皆曰始、言善以始其事。諸言法陰之類者、皆曰終、言惡以終其謀36。 5」

◎「吉凶大命繫焉29」この句及び注29は、嘉慶十年本にのみある。道蔵本では、注28の最後の部分に「吉凶繫焉」の四字がある。注に竄入したものと思われる。◎「以」、「亡」、「者」、道蔵本欠、嘉慶十年本、四庫全書本有り。◎「其」、道蔵本、四庫全書本、嘉靖本は「爲」に作る。嘉慶十年本、嘉靖本の盧文弨等の校正に従う。

捭闔は、道の大化、説の変なり。必ず豫め其の変化を審にす。吉凶の大命、焉に繫る。

口は、心の門戸なり。心は神の主なり。志意、喜欲、思慮、智謀、此れ皆門戸に由りて出入す。故に之を関するに捭闔を以てし、之を制するに出入を以てす。

之を捭すとは、開なり、言なり、陽なり。之を闔すとは、閉なり、黙なり、陰なり。陰陽其れ和すれば、終始其れ義あり。故に長生、安楽、富貴、尊栄、顕名、愛好、財利、得意、喜欲を言ふは陽為り、始と曰ふ。故に死亡、憂患、貧賤、苦辱、棄損、亡利、失意、有害、刑戮、誅罰を言ふは陰為り、終と曰ふ。諸言、陽に法るの類は、皆、始と曰ふ。善を言ひて以て其の事を始む。諸言、陰に法るの類は、皆、終と曰ふ。悪を言ひて以て其の謀を終ふ。 5」

「捭闔」は、道の大化、つまり本来的あり方が現象を

変化させる大いなるはたらきであり、それは言葉の変化なのである。従って、必ず実践する前には、あらかじめ、その言葉の変化が、どのように物事を変化させるかをはっきりさせておく。吉となるか凶となるかの重要な運命は、この言葉の変化、「捭闔」に繋るものである。

口は心の門戸であり、心は精神（感覚、思考のすべてのはたらき）の主体である。意志、欲求、思慮、智謀、これらは皆、口という門戸により、言葉として往来する。だから、「捭闔」でもってこの言葉を管理し、往来させるかどうかでもって言葉をコントロールする。（口だけが目、耳と異なり主体的である。）　ことばを「捭す」とは、口を開くこと、言うことであり、「陽」（＋）に分類される。ことばを「闔す」とは、口を閉ざすこと、沈黙であり、「陰」（－）に分類される。よって陰陽が調和して循環するなら、物事の展開は本来あるべき姿として現れる。だから、長寿、安楽、富貴、尊栄、有名、愛好、財利、得意、欲求について言うことは「陽」（＋）であり、物事の「始り」という。同様に、死亡、憂患、貧賤、苦辱、棄損、亡利、失意、有害、制裁、処罰について言うことは「陰」（－）であり、物事の「終り」という。種々の言葉で「陽」に従うものは、皆「始り」という。その点で善であることを言って、その事を始めるのである。種々の言葉で「陰」に従うものは、皆「終り」という。その点で悪であることを言って、その事を終りにするのである。

5」

28　言事無開闔則大道不化、言説無變。故開閉者、所以化大道、變言說。事雖大、莫不成之於變化。故必豫審之。

29　天命謂聖人稟天命王天下。然此亦因變化而起。故曰、吉凶大命繫焉。

30　心因口宣、故曰、口者心之門戸也。神爲心用、故曰、心者神之主也。

31　凡此八者、皆往來於口中。故曰、皆由門戸出入也。

32　言上八者若無關閉、事或不節。故關之以捭闔者、所以制其出入。開言於外、故曰、陽也。閉情於內、故曰、陰也。

33　開閉有節、故陰陽和、先後合宜、故終始義。

34　凡此皆欲人之生、故曰陽曰始。

35 凡此皆欲人之死、故曰陰曰終。

36 謂言說者、有於陽言之、有於陰言之。聽者、宜知其然也。

捭闔之道、以陰陽試之37。故與陽言者依嵩高、與陰言以依卑小38。以下求小、以高求大39。由此言之、無所不出、無所不入、無所不可40。可以說人、可以說家、可以說國、可以說天下41。爲小無內、爲大無外42。益損、去就、倍反、皆以陰陽御其事43。陽動而行、陰止而藏。陽動而出、陰隱而入。陽還終陰、陰極反陽44。以陽動者、德相生也。以陰靜者、形相成也。以陽求陰、苞以德也。以陰結陽、施以力也45。陰陽相求、由捭闔也46。此天地陰陽之道、而說人之法也47。爲萬事之先、是謂圓方之門戶48。 6」

◎「可40」の上、道蔵本「言」の字有り。嘉慶十年本無し。衍。◎「隱」、道蔵本「隨」に作る。嘉慶十年本に従う。◎「陰」、道蔵本「始」に作る。嘉慶十年本に従う。

捭闔の道は、陰陽を以て之を試む。故に陽と與に言ふ者は崇高に依り、陰と與に言ふ者は卑小に依る。下を以て小を求め、高を以て大を求む。此に由りて之を言はば、出でざる所無く、入らざる所無く、可ならざる所無し。以て人に說くべく、以て家に說くべく、以て国に說くべく、以て天下に說くべし。小を為さば内無く、大を為さば外無し。益損、去就、倍反、皆陰陽を以て其の事を御す。陽は動きて行き、陰は止まりて蔵す。陽は動きて出で、陰は隱れて入る。陽は還りて陰に終り、陰は極まりて陽に反る。陽を以て動く者は、徳相ひ生ずるなり。陰を以て靜なる者は、形相ひ成るなり。陽を以て陰を求むるは、苞むに徳を以てするなり。陰を以て陽に結ぶは、施すに力を以てするなり。陰陽相ひ求むるは、捭闔に由る。此れ天地陰陽の道にして人に徳の法なり。万事の先為り、是れ円方の門戸と謂ふ。 6」

「捭闔」の道、(本来的な言葉)は、この「陰陽」を用いて試されるものなのである。だから、「陽」に従って言うということは、永遠、拡大といった意識の高さに基いて言うのであり、「陰」に従って言うということは、個人の利害のレベルといった卑小さに基いて言うものである。そこで、意識を個人のレベルへと下降させて言うことで、「小」(その人個人としてのあり方、我を損すること)を求め、意識を上昇させて言うことで「大」(永続する世界全体のなかにその人を位置づけること。)を求めるのである。

以上の点からこの「捭闔」の道についていうならば、言葉として出ないものはなく、人の耳に入らないものはなく、できないものはないのである。そこで、人に説くこともできるし、家に説くことも、国に説くことも、世界に説くこともできるのである。

つまり、「小」を追及していった場合には、その人をその人にしている根本（道、言葉）まで到達し、そこからその人のあり方を位置づけるのであるから、「内」、つまりそのものを成り立たせる前提はなく、そのものに基いているのであり、「大」を追及していった場合、世界を成り立たせているもの（道、言葉）そのものへと拡大し一体化するのであるから、その「外」、つまりその世界を成り立たせている前提はなく、それが前提、根拠そのものだということになるのである。

「益損」（増減、つまりある事柄について増大、評価するか、減少、否定するか）、「去就」（就くか離れるか）、「倍反」（背くか帰するか）は、皆この「陰陽」でその事を取り扱うのである。「陽」は活動であり、異なるあり方への移動であり、「陰」は停止であり、そのあり方に止まって、それを守るものである。「陽」は動いて現れるものであり、「陰」は隠れて門戸に入る、つまり心の内に入るものである。「陽」は廻りめぐって「陰」にたどり着き、「陰」は極まっては、「陽」へと復帰する。

「陽」に従って動くということは、「徳」（本来の心のはたらき）が関係として生ずるということである。「陰」に従って静であるということは、「形」（その場におけるあり方）が関係として形成されるということである。「陽」の立場で「陰」を求めるのは、「徳」で包み込むことである。（高から低への流れ）又、「陰」の立場で「陽」に結びつこうとするのは、力を施すことである。（低から高への流れ）そして、「陰」、「陽」が互いに求め合うのは、「捭闔」（開閉）に基づくものなのである。これが、天地陰陽の道（本来のあり方、言葉）であり、人に物を説く方法なのである。

万事の前提であり、これを「円方の門戸」（存在の前提）という。　6」

37　謂或撥動之、或閉藏之、以陰陽之言試之、則其情慕可知。

38　謂與陽情言者、依崇高以引之、與陰情言者依卑小以引之。

39　陰言卑小、故曰以下求之、陽言崇高、故曰以高求之。

40　陰陽之理盡、小大之情得。故出入皆可。出入皆可、何所不

可乎。

41 無所不可、故所說皆可也。

42 盡陰則無內、盡陽則無外。

43 以道相成曰益、以事相賊曰損、義乖曰去、志同曰就、去而遂絶曰倍、去而復來曰反。凡此不出陰陽之情、故曰、皆以陰陽御其事也。

44 此言君臣相成、由陰陽相生也。

45 此言君以爵祿養臣、臣以股肱宣力。

46 君臣、所以能相求者、由開閉而生也。

47 言既體天地象陰陽。故其法可以說人也。

48 天圓地方、君臣之義也。理盡開閉、然後能生萬物。故爲萬事先。君臣之道、自此出入、故曰、圓方之門戶、圓、君也。方、臣也。

反應　第二1

古之大化者、乃與無形俱生2。反以觀往、覆以驗來、反以知古、覆以知今、反以知彼、覆以知己3。動靜虛實之理、不合於今、反古而求之4。事有反而得覆者、聖人之意也5。不可不察6。

人言者、動也。己默者、靜也。因其言、聽其辭7。言有不合者、反而求之、其應必出8。言有象、事有比。既有象比以觀其次9。　7」

◎「無形俱生2」の「無」、道藏本「无」に作る。以下総て「無」の字に統一する。◎「來」、道藏本「今」に作る。嘉慶十年本、四庫全書本に従う。◎「於」、道藏本「來」に作る。嘉慶十年本に従う。◎「既」、道藏本「其」に作る。俞樾前掲書に従って改める。

反応　第二

古の大に化する者は、乃ち無形と俱に生ず。反して以て往を観、覆して以て来を験し、反して以て古を知り、覆して以て今を知り、反して以て彼を知り、覆して以て己を知る。動静虛実の理、今に合はざれば、古に反して之を求む。事、反して覆を得る者有るは、聖人の意なり。

察せざるべからず。

人の言ふは動なり。己、黙するは静なり。其の言に因り、其の辞を聴く。言、合はざる者有らば、反して之を求むれば、其の応必ず出づ。言に象有り、事に比有り。既に象比有らば、以て其の次を観る。　7」

反応　第二

古の大いに言葉で世界を変化させたものは、「無形」、つまり形を形とする、言葉を生み出すものそのものの視点にあった。（生み出された言葉によって縛られずにあった。）そして、そうするために、今のその立場から、それを覆しその前提にとらわれず振り返って過去を見、そこからさかのぼって未来を確実に予測し、更にその前提へと拡大する形でとらわれずに振り返り、過去の全体としての古を知り、そこから逆にたどって、今が何故このような今であるかを知り、その前提をひっくり返しその様にある他者の存在をそのようなもの（言葉により位置づけられるもの）と知ることにより、そこから逆に考えて、その様な他者に関わるところのすべてを言葉によって位置づける我の存在を自覚したのである。（相対的関係の焦点であるにもかかわらず、その様な我を我と位置づけ得る立場を自覚したと言うこと。）だから、陰陽、捭闔という動静、虚実の理、つまり行動発言の原則で、現在に通用しないところがあれば、古を振り返ってその通用するものをとらわれずに求めたり、物事を己や既成概念にとらわれずひっくり返して前提を相対化し、そこから又さかのぼっていって通用するものをつかんだりするというのは、聖人（克己者）としての心の現れ、意志である。よくよく自らのなかで察しなければならない。

人が何かについて言うというのは、「動」、つまり有形であり、自分が黙るというのは、「静」、つまり無形である。この立場で、相手の言葉に因って、己を立てず、その言葉がどこから何を指してそう言うのかを聞くのである。だから、相手の言葉で道理上相手の意図しているものと合わないと思われるものがあれば、反問し、自らの予測にとらわれず、その前提をひっくり返してその事を求めれば、その応、答は、必ず出てくるものである。「言」、言葉には、「象」（基くイメージ）が有り、「事」、事柄には「比」（比べるもの）が有る。「象」と「比」があるからには、それによって、その「言」と「事」とがどこから来るのかがわかるのである。　7」

1　聽言之道、或有不合、必反以難之。彼因難而更思、必有以

應也。

2 大化者、謂古之聖人以大道化物也。無形者、道也。動必由道、故曰、無形俱生也。

3 言大化聖人、稽衆捨己、舉事重愼、反覆詳驗。欲以知來、先以觀往、欲以知今、先以考古、欲以知己、先度於彼。故能舉無遺策、動必成功。

4 動靜、由行止也。虛實、由眞僞也。其理不合於今、反求諸古者也。

5 事有不合、反而求彼、翻得覆會於此。成此在於考彼、契今由於求古、斯聖人之意也。

6 不審則失之於幾、故不可不察也。

7 以靜觀動、則所見審。因言聽辭、則所得明。

8 謂言者、或不合於理、未可卽斥。但反而難之、使自求之、則契理之應、怡然自出也。

9 應理既出。故能言有象、事有比。前事既有象比、更當觀其次、令得自盡。象謂法象、比謂比例。

象者、象其事。比者、比其辭也。以無形求有聲10、其釣語合事、得人實也11。其猶張罝網而取獸也。多張其會而司之。道合其事、彼自出之。此釣人之網也12。常持其網驅之。其言無比、乃爲之變13、以象動之、以報其心、見其情、隨而牧之14。己反往、彼覆來。言有象比、因而定基15。重之、襲之、反之、覆之、萬事不失其辭16。聖人所誘愚智、事皆不疑17。 8」

◎「猶」、道藏本欠。嘉慶十年本に従って補う。

象は、其の事に象る。比は、其の辞を比するなり。無形を以て有声を求め、其の語を釣りて事に合はば、人の実を得るなり。其れ猶ほ罝網を張りて獸を取るがごときなり。多く其の会に張りて之を司ふ。道、其の事に合へば、彼、自ら之を出す。此れ人を釣るの網なり。常に其の網を持して之を驅る。其の言、比無くんば、乃ち之が変を為し、象を以て之を動かし、以て其の心に報じ、其の情を見、随ひて之を牧す。己、往を反すれば、彼、来を覆し、言に象比有らば、因りて基を定め、之を重ね、之を襲ひ、之を反し、之を覆すれば、万事、其の辞を失

はず。聖人の愚智を誘う所、事、皆疑はず。　8」

「象」は、その基く事柄を象るものであり、「比」は、そのことについて言われた言葉を比べることである。だから、「無形」の立場にあって、「有声」（具体的なその人の立場からの発言）を求め、言わせて言葉を釣り上げ、それがその事に合致するならば、相手の本当の立場、意図、「実」がわかるのである。それは、丁度網を張って獣を捕えるようなものである。多くの網を仕掛けて獣を待つように、相手の多くのあり方を想定し、相手の言葉を待つのである。こちらのあり方が、道理上、その事にふさわしいものであれば、相手は、必ずこちらの知りたい「言」を出すものである。これが人の真実を釣り上げる網である。だから、常に「無形」のあり方でこの網を用いて相手を制し駆り立て、言葉を得ようとするのである。相手の言葉に比べることのできるものがなければ、こちらの視点を変化させ、相手の言葉の基くと思われるイメージでもって動かして発言させ、そのことで相手の心に問いかけ、その反応としての「情」（本当のところ）を観察してつかみ取り、それによって相手をコントロールする。こちらが、「往」（相手の過去の言動）をとらわれず、こだわらずにひっくり返してたずねれば、相手は、「来」（将来への意図、つもり）で答えるし、その言葉に「象」、「比」があれば、相手の立場、意図するところはつかめるので、それによってその対応の基本を定め、何度も重ねて繰り返し、尋ねては確かめ続けるならば、万事はその言葉を失わず、真実をつかめるので、主体を確立できる。だから、聖人が愚者、知者を誘導するあり方には、迷うと言うことがないのである。　8」

10　理在玄微、故無形也。無言則不彰、故以無形求有聲。聲卽言也。比謂比類也。

11　得魚、在於投餌、得語、在於發端。發端則語應、投餌則魚來。故曰釣語。語則事合。故曰、合事。明試在敷言。故曰、得人實也。

12　張網而司之、後獸自得。道合其事、彼理自出。言理既彰、聖賢斯辨。雖欲自隱、其道無由。故曰、釣人之網也。

13　持釣人之網、驅令就職事也。或乖彼、遂不言無比。如此則爲之變。變常易網、更有以象之者矣。

14　此言其變也。報猶合也。謂更開法象以動之。既合其心、則

其情可見。因隨其情[慕]而牧養[之]也。

15 己反往以求彼、彼必覆來而就職、則奇策必申。故言有象比、則口無擇言。故可以定邦家之基矣。

16 謂象比之言、既可以定基、然後重之、襲之、反[之]、覆之。皆謂再三詳審不容謬妄。故能萬事允愜、無復失其辭者也。

17 聖人誘愚則閉藏[之]、以知其誠、誘智則撥動之、以盡其情、咸得其實。故事皆不疑也。

[故]善反聽者、乃變鬼神以得其情18。其變當也、而牧之審也19。牧之不審、得情不明。得情不明、定基不審20。變象比必有反辭、以還聽之21。欲聞其聲、反默。欲張反瞼、欲高反下、欲取反與22。欲開情者、象而比之、以牧其辭。同聲相呼、實理同歸23。

或因此、或因彼、或以事上、或以牧下24。此聽眞僞、知同異、得其情詐也25。動作言默、與此出入、喜怒由此、以見其式26。　9」

◎「故」、道蔵本「古」に作る。嘉慶十年本に従う。

故に善く反聽する者は、乃ち鬼神を変じて以て其の情を得。其の変の当るや、之を牧すること審なり。之を牧すること審ならざるは、情を得ること明らかならざればなり。情を得ること明らかならざれば、基を定むること審ならず。象比を変ずれば、必ず反辞有り、以て還りて之を聴く。其の声を聞かんと欲すれば、反りて黙す。張らんと欲すれば反りて瞼(おさ)め、高からんと欲すれば反りて下り、取らんと欲すれば反りて與ふ。情を聞かんと欲する者は、象して之を比し、以て其の辞を牧す。同声は相ひ呼び、実理は同帰す。或は此に因り、或は彼に因り、或は以て上に事へ、或は以て下を牧す。此れ真偽を聴き、同異を知り、其の情詐を得るなり。動作、言黙、此と出入し、喜怒、此に由り、以て其の式を見る。　9」

それ故に、こだわらずに聞くことの巧みな者は、鬼神を変じ、つまり、(深層)意識を変化させることによって、相手の「情」をつかむのである。その変化が当たっていれば、相手をはっきりとつかみコントロールできる。相手をしっかりつかんでコントロールできないのは、はっきりと相手の「情」をつかんでいないからなのである。「情」をはっきりとつかんでいなければ、対応の基本もはっきりと定められない。「象」、「比」を変化させ鬼神を変ずるなら、必ず相手はそれに反応する言葉を発する

ので、退いてこれを聞くのである。相手の言うことを聞こうとするなら、こだわらずに黙る。拡張しようとするなら、こだわらずに収める。高くしようとするなら、こだわらずに下る。取ろうとするなら、こだわらずに与える。相手の「情」を聞き知ろうとするなら、その言葉の基くイメージを読み取り、これを同類の他の事例に比較し、そこで相手の言葉をコントロールする。同じ意図をもつ言葉は引き合うものだし、実際の筋道は、同じところに行き着くものである。ある時はこの立場により、ある時はあの立場により、とらわれず、心に従い自由自在に対応し、ある時は上に仕え、ある時は下を制する。これが、真偽を聞き分け、立場の同異を知り、相手の言動の実際、虚実を得るという事である。行動から発言、沈黙に到るまで、すべてはこのあり方によって決断し、喜怒の感情までもこれに基いて行い、そこに、そのあるべきあり方を見出すのである。　9」

18　言善反聽者、乃坐忘遺鑒、不思玄覽。故能變鬼神以得其情、洞幽微而冥會。夫鬼神本密、今則不能、故曰變也。

19　言既變而當理、然後牧之之道審也。

20　情明、在於審牧。故不審則不明。審基在於情明。故不明則不審。

21　謂言者於象比有變、必有反辭以難之。令其有言、我乃還靜以聽之。

22　此言反聽之道。有以誘致之。故欲聞彼聲、我反靜默、欲彼開張、我反瞼歛、欲彼高大、我反卑下、欲彼收取、我反施與。如此則物情可致、無能自隱也。

23　欲開彼情、先設象比以動之。彼情既動、將欲生辭。徐徐牧養、令其自言。譬猶鶴鳴于陰、聲同必應。故能以實理相歸也。

24　謂所言之事、或因此發端、或因彼發端。其事有可以事上、可以牧下者也。

25　謂眞僞、同異、情詐、因此上事而知也。

26　謂動作言默、莫不由情、與之出入。至於或喜或怒、亦由此情以見其式也。

皆以先定爲之法則27、以反求覆。觀其所託。故用此者28、

己欲平靜、以聽其辭、察其事、論萬物、別雄雌29。雖非其事、見微知類30、若探人而居其内。量其能射其意也、符應不失、如螣蛇之所指、若羿之引矢31。　10」

皆、先定を以て之が法則と為す。反を以て覆を求め、其の託する所を観る。故に此を用ふる者は、己、平静にして以て其の辞を聴き、其の事を察し、万物を論じ、雌雄を分たんと欲す。其の事に非ずと雖も、微を見て類を知ること、人を探りて其の内に居るが若し。其の能を量り其の意を射るや、符応して失はざること、螣蛇（とうだ）の指す所の如く、羿（げい）の矢を引くが若し。　10」

すべては、先定（先に「情」、「実」をつかんで対応方針を決しておくこと）が原則である。「反」（前提にこだわらず、とらわれずにひっくり返して問う）によって「覆」（相手の反応）を求め、相手のしがみ付いているもの、「情」を把握する。故に、この有り方を用いる者は、自らは平静であり、そのことによって相手の言葉を聞き、その事柄を洞察判断し、万事万物を論じ、優劣を分ち、価値の原点に立つであろう。自らには直接関わりのない事でも、微細なことから類推して実体を知るさまは、人を調べて、その心の中に居る様である。相手の能力を測り、その意図を見抜くのは、符節を合わせるようにぴったりと実態に対応し、まるで螣蛇（神蛇）が空を飛び、狙ったものに向うようであり、弓の名人の羿が矢を放つように、必ず目指すものを射抜くのである。　10」

27　謂上六者皆以先定於情、然後法則可爲。

28　反於彼者、所以求覆於此、因以觀彼情之所託。此謂信也。知人在於見情、故言用此也。

29　謂聽言之道、先自平靜。既得其辭、然後察其事、或論序萬物、或分別雄雌。

30　謂所言之事、雖非時要、然觀此可以知彼、故曰見微知類。

31　聞其言則可知其情。故探人而居其内則情原必盡。故量能射意萬無一失。若合符契螣蛇所指、禍福不差。羿之引矢、命處輒中。聽言察情、不異於此。故以相況也。

故知之始己、自知而後知人也32。其相知也、若比目之魚。其見形也、若光之與影也33。其察言也不失、若磁石之取鍼、如舌之取燔骨34。其與人也微、其見情也疾35、

如陰與陽、如陽與陰、如圓與方、如方與圓36。未見形、圓以道之、既見形、方以事之37。進退左右、以是司之38。已不先定、牧人不正39、事用不巧。是謂忘情失道40。己審先定、以牧人、策而無形容、莫見其門、是謂天神41。

11」

◎「其」、道藏本欠。嘉慶十年本に従って補う。◎32以下の文、宋太平御覽巻四六二人事部には、「又曰、反覆篇云、其和也、若比目魚、其伺言也、若聲與嚮。」とある。◎「如」、「見」、道藏本欠。嘉慶十年本に従って補う。

故に之を知るは己に始る。自ら知りて後、人を知るなり。其の相ひ知るや、比目の魚の若く、其の形を見すや、光の影に與るが若きなり。其の言を察するや、失はざること、磁石の鍼を取るが若く、舌の燔骨を取るが如し。其の人に與るや微に、其の情を見るや疾きこと、陰と陽との如く、陽と陰との如く、円と方との如く、方と円との如し。未だ形を見ざれば、円、以て之を道き、既に形を見れば、方、以て之を事とす。進退左右、是を以て之を司る。己、先定せざれば、人を牧すること正しからず。事用、巧ならず。是れ忘情失道と謂ふ。己、審に先定し、以て人を牧すれば、策して形容無く、其の門を見る莫し、是れ天神と謂ふ。

11」

それ故に、このあり方を知る要は、自分自身にその原点がある。つまり、自らを知ることではじめて人を知るということである。(自らが如何に立場や言葉、経験にとらわれて存在させられているかを己を越えてつかむ。人＝自己は言葉の集積という錯覚でしかないということであり、相対的な言葉の関係によって成立している仮の点であり、世界という言葉の枠組みの一部として位置づけられていることを知れば、自ずから、相手なるもの、人なるものがどのように存在し行動し、何を求めるのかが、手にとるようにわかるという事。)そのあり方が、我と人、こちらとあちらという関係を知るありさまは、比目の魚、一心同体のコピーのように正確につかみとるのであり、このあり方、方法が形を示す時は、我と相手を光と影のように位置づけるのである。そのあり方が、言葉を考察し見落とすことのないさまは、磁石が針を引きつけるようであり、舌が炙り肉の中に残った小骨を取り分けるようである。そのあり方が、人に関わるさまは、微妙であり、「情」を見抜くさまは極めて速く、頂度一瞬も止まらぬ変化である陰と陽との関係、それは同時に陽と陰でもあるという相対的関係のように微妙かつ速やかであり、円と方(無形と有形)、又方と円との様に、現象という変

化して止まないものの中での相対的あり方のようである。未だ形として現れていないものには、こちらも「円」、無形のあり方で導き、既に、ある一つの形として現れているものには、こちらも「方」、具体的形、立場でこれを扱う。進退褒貶（行動と評価）は、このあり方に基き、これを取り仕切るのである。だからこそ、自らが「先定」し、情をつかみ決断していなければ、人を正しくあるべくあるようにコントロールは出来ないのであり、計画した事柄の効果も不満足なものに終る。これを、「忘情失道」、「情」をつかむことを忘れ、あるべきあり方、心よりする本来的ことばを失っているというのである。自らが、精密に「先定」し、そこで人をコントロールすれば、計画に不自然なところは見えず、誰がその様に取り計らったかもわからず、妬まれたり憎まれたりせずに済むのである。これを「天神」（本来的な心のはたらき）というのである。

11」

32 知人者智、自知者明。智從明生。能生智、故欲知人先須自知也。

33 我能知己、彼須我知、必兩得之、然後聖賢道合。故若比目之魚。聖賢合則理自彰、猶光生而影見也。

34 以聖察賢、復何所失。故若磁石之取鍼、舌之取燔骨也。

35 聖賢相與、其道甚微。不移寸陰、見情甚疾。

36 君臣之道、取類股肱、比之一體。其來尚矣。故其相成也、如陰與陽、其相形也、猶圓與方。

37 謂臣向晦入息、未見之時、君當以圓道導之。亦既出潛離隱、見形之後、卽以才職任之。

38 此言用臣之道、或升進、或黜退、或貶左、或崇右、一準上圓方之理。故曰、以是司之。

39 方圓進退、己不先定、則於牧人之理不得其正也。

40 用事不巧、則操末續顛、圓鑿方枘、情道兩失。故曰、忘情失道也。

41 己能審定、以之牧人。至德潛暢、玄風遠扇。非形非容、無門無戸。見形而不及道、日用而不知。故謂之天神也。

内揵　第三1

君臣上下之事、有遠而親、近而疏2、就之不用、去之反求3。日進前而不御、遙聞聲而相思4。事皆有内揵、素結本始5。或結以道徳、或結以黨友、或結以財貨、或結以采色6。用其意、欲入則入、欲出則出、欲親則親、欲疏則疏、欲就則就、欲去則去、欲求則求、欲思則思7、若蚨母之從其子也、出無間、入無朕、獨往獨來、莫之能止8。　12」

◎「朕」、道蔵本「眹」に作る。嘉慶十年本に従う。

内揵（なけん）　第三

君臣上下の事、遠にして親、近にして疎、之に就けども用ひられず、之を去りて反りて求められ、日々に前に進むも御せず、遥かに声を聞きて相ひ思ふ有り。事、皆、内揵（なけん）有り、素より本始に結ぶ。或は結ぶに道徳を以てし、或は結ぶに党友を以てし、或は結ぶに財貨を以てし、或は結ぶに采色を以てす。その意を用ふれば、入るを欲すれば則ち入り、出づるを欲すれば則ち出で、親むを欲すれば則ち親み、疎ずるを欲すれば則ち疎じ、就くを欲すれば則ち就き、去るを欲すれば則ち去り、求むるを欲すれば則ち求め、思ふを欲すれば則ち思ふこと、蚨（ふぼ）母の其の子に従ふや、出づるに間無く、入るに朕（あと）無く、独り往き独り来り、之を能く止むる莫きが若し。　12」

内揵　第三

君臣、上下の関係には、次の様な事がある。それは、離れた関係にあるのに親しみ、日常接するような関係にあるのに疎じ、近づき親しもうとしても用いられず、遠ざかり離れようとしても反対に必要とされ、日々君前に進んでも相手にせず、遥かに声望を聞いて用いたいと心に思う、というようなことである。何故そうなるのか。事には皆、「内揵」（内なるかんぬき、心の内でそうだと思っていること。）があり、もとよりこの大本の始め、相手の根本的立場にこちらを結びつけるかどうかが関わっているのである。結びつく要因には、道徳（本来的ことばと心のはたらき）もあるし、郷党朋友（同一経験、同一傾向）、財貨（物欲）、風采色情（名声欲、色欲）もある。だから、その結びつける意欲を用いるなら、出入親疎、去就求思、といった人間関係のすべては、思いのままであり、それは、蚨母（土蜘蛛の母）がその子に就いて世話をするときに、巣から出るときも間隙なく速やか

に穴に蓋をして去り、入るにもその兆しも見せぬようにはいり、自由自在に往来して、誰にも止める事などできないようなものである。 12」

1 揵者、持之令固也。言君臣之際、上下之交、必內情相得、然後結固而不離。

2 道合則遠而親、情乖則近而疏。

3 非其意則就之而不用、順其事則去之而反來。

4 分違則日進前而不御、理契則遙聞聲而相思。

5 言或有遠而相親、去之反求、聞聲而思者、皆由內合相待、素結其始。故曰、皆有內揵素結本始也。

6 結以道德、謂以道德結連於君、若帝之臣。名爲臣、其實爲師也。結以黨友、謂友道結連於君、王者之臣。名爲臣、其實爲友也。結以貨財、結以采色、謂若桀紂之臣、費仲、惡來之類、是也。

7 自入出以下八事、皆用臣之意、隨其所欲、故能固志於君、物莫能間也。

8 蚨母、螮蟧也。似蜘蛛、在穴中有蓋。言蚨母養子、以蓋覆穴、出入往來、初無間隙。故物不能止之。今內揵之臣、委曲從君、以自結固、無有間隙、亦由是也。

內者、進說辭也。揵者、揵所謀也9。欲說者、務隱度、計事者、務循順10。陰慮可否、明言得失、以御其志11。方來應時、以合其謀12。詳思來揵往、應時當也13。夫內有不合者、不可施行也14。乃揣切時宜、從便所爲、以求其變15。以變求內者、若管取揵16。言往者、先順辭也。說來者、以變言也17。善變者、審知地勢、乃通於天、以化四時、使鬼神合於陰陽18。而牧人民、見其謀事、知其志意19。事有不合者、有所未知也20。合而不結者、陽親而陰疏21。事有不合者、聖人不爲謀也22。 13」

◎「也」、道藏本欠。嘉慶十年本に従って補う。◎「欲說者、」以下22までの本文及び陶宏景注は、道藏本には無く、嘉慶十年本にのみ有る。

内とは、説辞を進むるなり。揵とは、謀る所を揵するなり。説かんと欲する者は、隠に度るに務め、事を計る者は、循順なるに務む。陰に可否を慮り、明に得失を言

ひ、以て其の志を御す。来に方りては時に応じ、以て其の謀に合す。詳に来を思ひて往を揵すれば、時に応じて当るなり。夫れ内に合せざる者有らば、施行すべからず。乃ち時宜を揣切し、為す所に便なるに従ひ、以て其の変を求む。変を以て内を求むるは、管もて揵を取るが若し。往を言ふは、先づ辞に順ふ。来を説くは、変を以て言ふなり。善く変ずる者は、審に地勢を知り、乃ち天に通じ、以て四時に化し、鬼神をして陰陽に合せしめ、而して人民を牧し、其の謀事を見、其の志意を知る。事に合せざる者有るは、未だ知らざる所有るなり。合するも結ばれざる者は、陽に親しみて陰に疎ず。事に合せざる者有らば、聖人は謀を為さざるなり。　13」

「内」とは、こちらの説を相手の心の内に進めることである。「揵」とは、その謀ったことを相手の心の内にしっかりと固定することである。説こうとするなら、密かに相手の「情」のあるところを推し測ることに務め、計画しようとするなら、それが物事の自然の流れに順うように務める。こちら側で、ひそかにそれが実現可能か、相手が納得できるものかどうかを考慮したうえで、明確にそのことの得失を言って、相手の意志をコントロールする。「来」（相手のつもり、将来への意志）に就いては、その時々に然るべく対応し、こちらの計謀に合致させる。詳らかに「来」を思慮して、相手の「往」（過去、現在の前提）をしっかり固定するなら、時の変化に対応し、然るべく相手の心にかなったものとなる。そもそも相手の心の内に合致しない要因があるなら、物事はうまく施行することは出来ない。そこで、時の宜しきにぴったり合致するものを適切に推し量り、相手が実行しやすい形に従って、そのことで相手の心の変化を求める。この変化でもって、相手の心の内にこちらの説を進めるのは、頂度、鍵を使って、しっかり固定された「揵」（かんぬき）を取り去るようなものである。相手の「往」（過去）を言うには、まず言葉に従い、解釈や評価を混えない。「来」を説くには、変化させるということを要点として言う。上手に変化させる者は、詳らかに「地勢」（人の環境、地位、勢力）を知り、そこで、「天」（その前提、拠って立つところ）に通じ、「四時」（時の変化、流れ）に一体化し沿うことで、「鬼神」（深層意識）を「陰陽」（現象、変化）に合致させて、（己のレベルを超えた自然の視点に立ち、）主体となり、人民を養い治め、（コントロールし、）彼等のくわだて行うところを見て、その意志がどこにあるのかを知る。事柄で、相手と話が道理上合致しないものがあるのは、こちらがまだ知らないところがあるので

ある。それを無理に合致させても、心が結びついていないものは、表面的には親しむが、心のうちでは疎んずる。だから、事柄で、話が相手と道理上合致しないものがあれば、聖人は、それに就いては思いをめぐらし謀り事をしたりはしない。13」

9 說辭既進、內結於君。故曰、內者、進說辭也。度情爲謀、君必持而不捨。故曰、揵者、揵所謀也。

10 說而隱度則其說必行、計而循順則其計必用。

11 謂隱慮可否、然後明言得失、以御君志也。

12 方謂道術。謂以道術來進必應時宜、以合會君謀也。

13 詳思計慮、來進於君、可以自固。然後往應時宜、必當君心也。

14 計慮不合於君、則不可施行也。

15 前計既有不合、乃更揣量切摩、當時所爲之便、以求所以變計也。

16 以管取揵、揵必離。以變求內、內必合。

17 往事已著。故言之、貴順辭。來事未形、故說之、貴通變也。

18 善變者、謂善識通變之理、審知地勢、則天道可知。故曰、乃通於天。知天則四時順理而從化。故曰、已化四時。鬼神者、助陰陽以生物者也。道通天地、乃能使鬼神合德於陰陽也。

19 既能知地、通天、化四時、合陰陽、乃可以牧養人民。其養人也、必見其謀事而知其志意也。

20 謂知之卽與合、未知卽不與合也。

21 或有離合而不結固者、謂以陽外相親、陰內相疏也。

22 不合謂圓鑿而方枘。故聖人不爲謀也。

故遠而親者、有陰德也。近而疏者、志不合也23。就而不用者、策不得也。去而反求者、事中來也24。日進前而不御者、施不合也。遙聞聲而相思者、合於謀、待決事也25。故曰、不見其類而爲之者、見逆。不得其情而說之者、見

非26。得其情、乃制其術27、此用可出、可入、可揵、可開28。故聖人立事、以此先知而揵萬物29。　14」

故に遠くして親しむ者は、陰徳有るなり。近くして疎ぜらるる者は、志、合せざるなり。就くも用ひられざる者は、策、得ざるなり。去るも反りて求めらるる者は、事、来に中るなり。日々に前に進むも御せられざる者は、施、合せざるなり。遥に声を聞きて相ひ思ふ者は、謀に合し、待ちて事を決せんとするなり。故に曰く、其の類を見ずして之を為す者は、逆らはれ、其の情を得ずして之に説く者は、非とせらる。其の情を得て、乃ち其の術を制す。此を用て出すべく、入るべく、揵すべく、開くべし、と。故に聖人の事を立つるや、此を以て先づ知りて萬物を揵す。　14」

それ故に、遠い関係にあるのに親しむのは、「陰徳」（隠れた、人の心を引きつけるはたらき）があるのである。身近に接していながら疎んぜられるのは、「志」（心の望む方向）が合致していないのである。臣下として就いても用いられないのは、献策が当を得ていないからである。その人の下を去っても反って求められるのは、関わっていることがその人の「来」（つもり、将来への考え）に適合しているのである。日々君前に進んでも君主が相手にしないのは、行っていることがその君主の考えていることに合致しないのである。君主が遥かに声望を聞いて心に用いたいと思うのは、思うその人物が謀り事の遂行に適うからで、得て計画を実行しようとしているのである。それ故に、次のように言われる。こちら側に友好的か反対の立場にあるのかといった、その類を見ないで行動するものは逆らわれ、相手の「情」をつかまずに説くものは拒否される。相手の「情」をつかみ、そこでそれにふさわしい方法を定める。だから、自由に言葉を出入、揵開（捭闔、開閉）し対応することが出来る。だから、聖人が何事かを計画立案する時は、以上のような理由から、まず相手の「情」を知り、それに関係してすべての物事（全体）を、こうだと押さえつかむ（全体の中に位置づける）のである。　14」

23　陰徳、爲陰私相得之徳也。

24　謂所言當時未合、事過始駭。故曰、事中來也。

25　謂彼所行、合於己謀、待之以決其事。故曰、遥聞聲而相思也。

26 言不得其情類而說之者、若北轅適楚、東軫遊秦、所以見非逆也。

27 得其情則鴻遇長風、魚縱大壑、沛然莫之能禦。故能制其術也。

28 此用者、謂用其情也、則出入自由、揵開任意也。

29 言以得情立事。故能先知可否。萬品所以結固而不離者、皆由得情也。

由夫道德、仁義、禮樂、忠信、計謀30、先取詩書、混說損益、議論去就31。欲合者用內、欲去者用外32。外內者、必明道數、揣策來事、見疑決之33、策無失計、立功建德34。治民入產業曰揵而內合35。上暗不治、下亂不寤、揵而反之36。內自得而外不留說、而飛之37。若命自來、己迎而御之38。若欲去之、因危與之39。環轉因化、莫知所爲、退爲大儀40。 15」

◎「忠信」、道藏本欠。嘉慶十年本に従って補う。◎「論去」、道藏本「去論」に作る。嘉慶十年本、四庫全書本に従って改める。◎「決」、「知」、道藏本「訣」、「之」に作る。嘉慶十年本に従って改める。

夫の道德、仁義、礼楽、忠信に由りて計謀し、先づ詩書を取り、混說損益して去就を議論す。合せんと欲する者は內を用ひ、去らんと欲する者は外を用ふ。外內は、必ず道數を明らかにし、来事を揣策し、疑を見て此を決すれば、策に失計無く、功を立て德を建つ。民を治め產業を入るるを、揵して內、合すと曰ふ。上、暗にして治めず、下、乱れて寤らざれば、揵して之を反す。內、自得して外、說を留めざれば、而ち之を飛す。若し命、自ら来らば、己、迎へて之を御す。若し之を去らんと欲すれば、危に因りて之に與ふ。環転、化に因らば、為す所を知る莫く、退きて大儀を為す。 15」

あの「道德」、「仁義」、「礼楽」、「忠信」といった、世間で承認されている価値によって謀り事を立て、先ず、『詩経』、『書経』（つまりその現在の世間で正統とされる文書、原典に相当するもの）を用い、時勢に適う様に取捨選択、増減して、就くか去るかを人と議論する。立場や考えを合致させようとするなら、「內」（情、本音）を用い、去ろうとするなら「外」（建前）を用いる。「外」、「內」は、必ず「道数」（ことばの道理）を明確につかみ、

「来事」（これからしようとする事）を推し量り画策し、疑問点に決断を加えていけば、画策したことにまずい方法はなくなり、功績をたて、人望（徳）を得て示すことになるのである。人々を治め安定した税収を得る事を、しっかり方策を固定して、相手の心に適った計画、という。君主が暗愚で統治せず、臣下が己に執着し混乱して筋道を見出せないなら、しっかり方策を固定し、この混乱を「反」する。（こだわらずに考察し、その前提をつかむ。）相手が、心のうちではこちらの進言する道理をつかんでいても、人に対しては、その説には意をとどめず認めないような態度であるなら、その人物を褒めて、その「情」をつかみ取る。もしその結果、そのことを扱うべき天命が自然と来たなら、自ら進んでこれを扱う。もし天命が到らず、去ろうとするなら、その危うい情勢に基いて、相手にそのことを扱うべき立場を与える。無限に対応して、変化に因るなら、こちらの意図を察するものはなく、退くことであるべきあり方を示す。15」

30　由夫得情、故能行道徳、仁義以下事也。

31　混、同也。謂先考詩書之言、以同己說。然後損益時事、議論去就也。

32　内謂情内。外謂情外。得情自合、失情自去。此蓋理之常也。

33　言善知内外者、必明識道術之數、預揣來事、見疑能決也。

34　既能明道數。故策無失計。策無失計、乃可以立功建德也。

35　理君臣之名、使上下有序、賦税之業、使遠近無差。上下有序、則職分明、遠近無差、則徭役簡。如此則國之基自固。故曰、捷而内合也。

36　上暗不治其任、下亂不寤其萌、如此天下無邦、域中曠主。兼昧者可行其事、侮亡者、由是而興。故曰、捷而反之。

37　言自賢之主、自以所行爲得而外不留賢者之說。如此者、則爲作聲譽而飛揚之、以釣其歡心也。

38　君心既善己、必自有命來召、己則迎而禦之、以行其志。

39　翔而後集、意欲去之、因其將危與之辭矣。

40　去就之際、反覆量宜、如員環之轉、因彼變化。雖優者、莫知其所爲。如是而退、可謂全身大儀。儀者、法也。

抵巇　第四1

物有自然、事有合離2。有近而不可見、遠而可知。近而不可見者、不察其辭也。遠而可知者、反往以驗來也3。16」

抵巇（しき）　第四

物に自然有り、事に合離有り。近くして見るべからず、遠くして知るべき有り。近くして見るべからざるは、其の辞を察せざるなり。遠くして知るべきは、往を反して以て来を験するなり。16」

抵巇　第四

物には、自ずからそうなる道理があり、事には、引き合ったり離れたりするということがある。近いのに見ることが出来ず、遠くて知る事が出来るという事がある。近いのに見られないのは、その言葉を推察していないのである。遠いのに知る事が出来るのは、「往」（過去）をこだわらずに振り返って、その前提をたずね、そのことで「来」（将来へのつもり）を確かめつかんでいるのである。16」

1　抵、擊實也。巇、釁隙也。牆崩因隙、器壞因釁。方其釁隙而擊實之、則牆器不敗。若不可救、因而除之。更有所營置、人事亦猶是也。

2　此言合離者乃自然之理。

3　察辭觀行、則近情可見。反往驗來、則遠事可知、古猶今也。故考往古、則可驗來今、故曰、反往以驗來也。

巇者、罅也。罅者、嶡也。嶡者、成大隙也4。巇始有朕、可抵而塞、可抵而卻、可抵而息、可抵而匿、可抵而得。此謂抵巇之理也5。事之危也、聖人知之、獨保其身、因化說事、通達計謀以識細微6。經起秋毫之末、揮之於太山之本7。其施外兆萌牙孽之謀、皆由抵巇。抵巇隙爲道術8。17」

◎「卻」、「末」道蔵本「却」、「未」に作る。◎「身」、道蔵本「用」に作る。嘉慶十年本に従って改める。

巇は罅（か）なり。罅は嶡（かん）なり。嶡は大隙を成す。巇は始め朕（きざし）有り、抵して塞ぐべく、抵して卻（しりぞ）くべく、抵して息むべく、抵して匿すべく、抵して得べし。此れ、抵巇の理と謂ふ。事の危きや、聖人、之を知り、独り其の身を保ち、化に

因りて事を説き、計謀に通達して以て細微を識り、秋毫の末に経起し、之を太山の本に揮ふ。其の兆萌、牙孽の謀を施すは、皆、抵巇に由る。巇隙を抵するは、道術為り。　17」

「巇」とは「罅」、ひび、隙間である。「罅」とは「嶡」、谷川である。「嶡」は大きな隙間を成しているものである。「巇」は始めに「朕」、兆しがあり、それは「抵」（手当て）して塞ぐこともできるし、退けることも、終息させることも、隠すことも、得ることもできるものである。これを「抵巇の理」（物事の隙間を手当てする筋道）という。事は常に変化し危いものなのであり、聖人はこれを察知し、揺ぎ無く自分自身を然るべく保ち、変化に基きそのことの扱いを説き、（その事に対する）計画に通じ、その要点に達して、細かく微妙なところをつかみ取り、毛先ほどの微細なことをきっかけに始め、それを泰山の下のような広大な場に展開する。聖人が、土崩瓦解の兆し、芽生えを取り除く謀り事を施すのは、すべて、この「抵巇」に由るのである。物事の隙間を手当てするというのが、「道術」（然るべき方策）である。　17」

4　隙大、則崩毀將至。故宜有以抵之也。

5　朕者、隙之將兆、謂其微也。自中成隙者、可抵而塞。自外來者、可抵而卻。自下生者、可抵而息。其萌微者、可抵而匿。都不可治者、可抵而得。深知此五者、然後盡抵巇之理也。

6　形而上者、謂之聖人。故危兆纔形、朗然先覺。既明且哲、故獨保其身也。因化説事、隨機逞術、通達計謀、以經緯識細微而預防之也。

7　漢高祖以布位登皇帝位、殷湯由百里而馭萬邦。經、始也。揮、發也。

8　言化政施外、兆萌牙孽之時、智謀因此而起。蓋由善抵巇之理、故能不失其機。然則巇隙既發、乃可行道術。曰抵巇隙爲道術也。

天下紛錯、上無明主、公侯無道德、則小人讒賊、賢人不用、聖人竄匿、貪利詐僞者作、君臣相惑、土崩瓦解而相伐射、父子離散、乖亂反目、是謂萌牙巇罅9。聖人見萌牙巇罅、則抵之以法。世可以治、則抵而塞之。不可治、則抵而得之。或抵如此、或抵如彼、或抵反之、或抵覆之10。五帝之政、抵而塞之、三王之事、抵而得之11。

諸侯相抵、不可勝數。當此之時、能抵爲右12。自天地之合離終始、必有巇隙、不可不察也13。察之以捭闔。能用此道、聖人也14。聖人者、天地之使也15。世無可抵、則深隱而待時、時有可抵、則爲之謀。可以上合、可以檢下16。能因能循、爲天地守神17。　18」

◎「紛」、「離」道蔵本「分」、「理」に作る。嘉慶十年本に従って改める。

天下紛錯し、上に明主無く、公侯、道徳無くんば、則ち小人、讒賊し、賢人用ひられず、聖人、竄匿し、貪利詐偽する者作り、君臣相ひ惑ひ、土崩瓦解して相ひ伐射し、父子は離散し、乖乱反目す、是れ萌牙、巇罅と謂ふ。聖人、萌牙、巇罅を見れば、則ち之を抵するに法を以てす。世、以て治むべくんば、則ち抵して之を塞ぐ。治むべからずんば、則ち抵して之を得。或は抵すること此の如く、或は抵すること彼の如く、或は抵して之を反し、或は抵して之を覆す。五帝の政は、抵して之を塞ぎ、三王の事は、抵して之を得。諸侯の相ひ抵するは、勝げて数ふべからず。此の時に当りては、能く抵するは右為り。天地の合離、終始より、必ず巇隙有り、察せざるべからず。之を察するに捭闔を以てす。能く此の道を用ふるは聖人なり。聖人は天地の使なり。世に抵すべき無くんば、則ち深く隠れて時を待ち、時に抵すべき有らば、則ち之が謀を為す。以て上に合すべく、以て下を検すべし。能く因り、能く循ひ、天地の為に神を守る。　18」

天下が混乱し、上に明主が居らず、諸侯に節操がなければ、小人（エゴイスト）が人の足を引っ張り陥れ、賢人は用いられず、聖人は逃れ隠れてしまい、利益を貪り、出来もしない理念や理想、ありもしない恐怖や邪悪を詐り言い立てるものが現れ、君臣は互いに信じられるものを失って惑い、秩序は土崩瓦解し、互いに攻撃し、親子もばらばらになり、せめぎあって背き乱れ、それぞれエゴに凝り固まって反目する。これを、「萌芽、巇罅」（崩壊への芽生え、破滅への隙間。）と言う。聖人は、「萌芽、巇罅」を見れば然るべき方法でもってこれを手当てしようとする。その方法とは、世の中が、そのまま治められるようなら、対応して、その世界、現体制の隙間を塞ぐ。治められないようなら、対応して、その世界を自らのものとする。その時、その状況に対応し、ある時は「反」（こだわらずとらわれずにひっくり返して問う）し、その原点に立ち戻り、ある時は「覆」（相手の反応をつかむ。）し、その未来を確立する。堯舜等の五帝の時代の政治は、対応して隙間を塞いだものであり（禅譲）、夏殷周三代の、

夏禹、殷湯、周の武王の三王の事跡は、対応して、世界を自らのものにしたものである（放伐）。それ以降（春秋時代）の諸侯が、互いに対応し、覇者となったのは数限りない。この今の時代（戦国時代）にあっては、対応することのできるものが、身分に関係なく、人に擢んでた者となる。天地が現象し展開して以来、必ず物事には、崩壊、破滅への隙間、「巇隙」が有る。よくよく考察しなければならない。そこで、考察するには、「捭闔」（開閉の道、つまり己を超えてあるべくあること。）を用いるのである。このあるべきあり方、方法を用いることのできるものが聖人である。聖人は、天地の使い、存在が生み出した然るべき存在、つまり、先天的なものである。世の中に、対応し手当てできる機会、状況がなければ、深く隠れて時を待ち、手当てできる時があれば、その機に因って計謀するのである。上、君主に合わせて隙間を塞ぐことも出来るし、下、自らが得て、取り仕切ることも出来る。時勢に因り従い、然るべく対応し、現象する世界を生み出す心の本来のはたらきたる「神」を守り、そのものの現れとして存在している。

18」

9　此謂亂政萌牙、爲國之巇罅。伐射謂相攻伐而激射也。

10　如此、謂抵而塞之。如彼、謂抵而得之。反之、爲助之爲理。覆之、謂因取其國。

11　五帝之政、世猶可理、故曰、抵而塞之。是以有禪讓之事。三王之事、世不可理、故曰、抵而得之。是以有征伐之事。

12　謂五伯時、右、由上也。

13　合離、謂否泰。言天地之道、正觀尙有否泰爲之巇隙。而況於人乎。故曰、不可不察也。

14　捭闔亦否泰也。體大道以經人事者、聖人也。

15　後天而奉天時、故曰、天地之使也。

16　上合、謂抵而塞之、助時爲治。檢下、謂抵而得之、便來歸己也。

17　言能因循此道、則大寶之位可居。故能爲天地守其神化也。

鬼谷子　巻上

注

（1）『鬼谷子』の文献学的資料考証及び研究史については、拙稿『鬼谷子』の文献学的考察―武内義雄説をめぐって―」（『中国の思想世界』所収　二〇〇六年三月）を参照されたい。